

# 地域が学び場

— 社会教育 —  
みんなが学び  
活躍するために

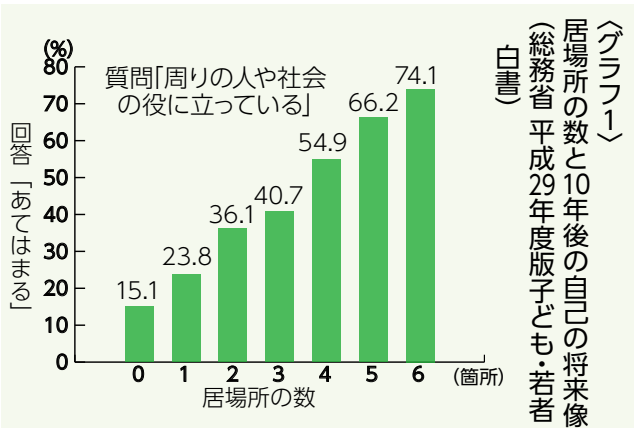


地域を担う子どもの教育は、学校だけで行われているわけではありません。体験活動や学習支援などの取り組みから、子どもと住民の関わり方を読み解くことができます。今回の特集では、地域に生まれた学び場の役割とそのチカラに注目します。

## 地 域の教育の現状

他者とながらを感じ、自分の居場所が複数ある若者は、将来「周りの人や社会の役に立っている」と高い割合で考えていて、社会貢献などについて前向きな将来像を持っている傾向があります(グラフ1)。しかし、少子化・核家族化が進む中で、子どもの成長過程に大人が関わる機会が少なくなっています。

学校と家庭に加え、地域住民が子どもの教育に関わり、居場所と感じられる場を増やしていくことは、子どもの自立や対人関係など、向上心や協調性、そして「生きる力」を育てる鍵ではないでしょうか。



## 家 庭・地域・学校をつなげる「社会教育」

【社会教育】青少年・成人に対して行われる組織的な教育活動のことで、学校教育と家庭教育以外を包含する概念のこと。

地域で子どもを育み、住民の活動の場を作ること、大人のやりがいも生まれます。お互いの成長・活躍が地域を活性化し、いい循環が生まれていく。これが社会教育の目指す一つの姿です。

学習を通じて住民同士がつながりを深め、成果を地域にフィードバックする。いわば「地域総がかりの教育」が社会教育です。そして、少子高齢化が進む子どもにとって厳しい社会の中で「生きる力」を養うため、社会教育は今、幼稚園や保育園と学校・家庭・地域といった枠組みを超えて、それぞれをつなげ「地域全体が学び場」といえる機能を果たすことが求められています。

そして、地域を一体的な学び場に変えていくためには、住民主体の場づくりや核となる人材が必要となります。そして、それらの資源を生かして地域と学校が連携・協働する「地域学校協働活動」や学校運営に参画する方法などにつなげていく。子どもを真ん中にした地域づくりと、学校の連携体制づくりを進めていくことが求められています。

# 学び場を創る実践者

## 子ども中心の地域づくり

地域全体で子どもたちを育む活動によって、その住民が役割や生きがいを得て、相互に影響する関係づくりが、学校にも地域にも行政にも求められています。



### 住 民が創る「学び場づくり」

市内でも近年は、自治会・町内会など既存の組織や、子どもをもつ親などが連携・協力して、子どもたちの学びの場・居場所づくりに取り組んでいます。

中でも、放課後の子どもの居場所づくりは活性化しています。

例えば、湯日地区の初倉西部ふれあいセンターで宿題の支援や遊びの見守りを行っている「湯日の子ども達を見守る会」が、当時の自治会長と定年退職後にヒターンしてきた男性を中心として発足しました。また、中溝公会堂を開放した「なかみぞさんち」は、母親たちと自治会を中心に、駄菓子屋を始めました。今では、子どもだけでなく大人のやりがいにもつながっていて、お互いの居場所づくりに発展しています。その他にも、三ツ合町の自治会が主体となって長期休業中の学習支援を行う「三ツ合町寺子屋」など、県・市の「寺子屋事業」から波及して地域で広まっている事業も生まれています。

川根小学校区では、地域おこし協力隊が学校と地域のコーディネーターとなり、子

### voice / 大人も子どもも好きになる地域へ

川根小コーディネーター むらまつりょうたろう 村松遼太郎さん

昨年度から、学校に地域の人材を紹介したり、イベントのアイデア出しに協力したりしています。子どもたちが「地元のために主体的に考えて何ができるか」を目的にしていますが、関わる大人たちにも地域について考えるきっかけになっています。地域の課題やお願いも、「子どものために」をキーワードにして呼びかければ、みんな手伝ってくれる。そんな「郷土愛の輪」が広がっていきたくてうれしいですね。



### voice / 子どものためから大人の楽しみに

なかみぞさんち きたじまたかこ 北島孝子さん

活動は週2日で、スタッフ15人ほどが各日2人ずつ店番をしています。大変ですが、子どもたちとふれあう楽しさがやりがいになっています。最近は、知り合った子どもたちと自然に声を掛け合えるようになりました。



自治会からも「子どものためにできる事業」として熱心な協力を得て、公会堂を自由に使わせてもらえたり、壊れた備品を地元の大工さんがすぐに直してくれたり、地域に支えられていることを実感しています。



市  
が取り組む「仕組みづくり」

学校・家庭・地域の連携協力を実現するため、市では平成25年度から「学校支援地域本部事業」を島田第二中学校で実施。コーディネーターが、学校の支援要望に応じてボランティアを募集し、住民が地域で活動を行います。また、家庭教育相談や学習支援など、専門の支援員などが子どもの学びをサポートしています。

平成29年度からは、県教育委員会の放課後学習支援のモデル事業として、初倉中学校区で「しまだはつくら寺子屋」を実施しています。これは、毎週水曜日の放課後に、教員OB、地元住民、中学から大学までの生徒が学習支援員として、小学生の学習を



- ①②はつくら寺子屋では、個別指導で学んだり、タブレット端末で学習したりします  
☎初倉公民館 ☎ 38-0002
- ③中溝公会堂で毎週月・金曜日に駄菓子屋を開いて子どもたちの居場所を作っています  
☎中溝町公会堂 ☎ 37-2525
- ④川根小児童が、地域の老人福祉施設利用者を招いて行った敬老会  
☎川根小学校 ☎ 53-2004

サポート。教員OBの公民館長がコーディネーターを務め、学習支援員となる地域の人材発掘や、学校との連絡調整などを行っています。同じく初倉地区では、「夢育・地育」という「地域総ぐるみで子どもたちの将来を育む」取り組みが、学校主導で行われています。これは、校長が設定した目指すべき子どもの姿「地域から学び、考え、地域で行動する子」を住民・保護者と共有し、学校と地域が一体となって子どもの将来を育む取り組みを行っています。具体的には、住民から地名や歴史を学んだり、生徒が初倉まつりに参加したり、卒業生による職業講話を開催したりするなど、地域とともにある学校づくりを進めています。

どもや保護者、住民を巻き込んだ地域愛を育む総合学習「川根ラブアクション」を始動。高齢者が正月飾り作りを教えたり、児童が商店や施設のアピールポイントを取材して探したり、住民と児童が一緒に給食を食べたりと、多世代が交流し、地域の良さを再認識する機会を作っています。更に今年度は、11月24日(土)に行われる川根小学校50周年記念事業と絡めて、在校生と卒業生が共に郷土を振り返る機会にもなっています。

学校と地域をつなぐ架け橋に

は つくら寺子屋は、子どもの学力を向上させることはもちろんですが、学校との連携も大切に行っています。子どもの学習状況を、連携担当教員を通じて学校へフィードバックするなど、一方的にならないよう心掛けています。学習の助けが必要な子への呼び掛けや、中学生ボランティアへの協力要請などは、学校の協力がなければできないことです。

支援員として参加してくれた学生や地域の人たちの中には、「教える喜び」からやりがいを感じ、支援員を続けてくれている人もいます。教員経験がない人の方が、子どもたちの成長する姿に胸打たれることも多いんですよ。また中学生も、後輩に教えることで自覚ましく成長しています。中学生が小学生に教えている時の目の輝きは、素晴らしいです。学校の負担も地域への負担も大きくない過ぎないよう、学校と地域がウィン・ウィンな関係づくりを目指しています。

実践者



初倉公民館 西田正鋭館長

# 子どもが 学校・家庭・地域をつなぐ

## 誰もが輝ける社会へ

教育を地域で支えるため、住民が学びの場を作ったり、行政が体制づくりに取り組んだりして、子どもを真ん中に地域が一体となる環境を構築しています。

### 先進事例

#### 地域も学校も オープンな関係構築を目指して

磐田市教育委員会 学校教育課 田中暁子指導主事

磐田市では、平成25年度以降、学校運営協議会委員や学校職員を対象にした研修会を行っているほか、地域とのつなぎ役になる「コミュニティスクール・ディレクター」や「コミュニティスクール・コーディネーター」を配置するなど、学校運営協議会と学校支援の機能の強化を図っています。これによって、学校支援の量も質も向上しました。また、中学生は学校活動や地域行事など、地域の人たちとの接点が増えたことで、防災訓練への出席率が高くなったり、被災した際に自分たちに何ができるかを主体的に考えるようになったりと、意識の変化が見られるようになってきました。

地域の人たちも、職業講話の講師など、自分の能力や知識を生かせる「自己実現の場」としてコミュニティスクールを活用してくれています。学校側も地域の人たちとの協働について理解を深め、これからも「地域とともにある学校」づくりを進めていきます。



### 子どもがつなぐ地域活動の場

市内には、学校や地域で活動している支援者の人たちが、多くいます。金谷の番生寺地区で活動している子育て団体「番生寺きしゃぼっぱ」では、小さな子どもを持つ親が子育てについて勉強し、ふれあう場を提供しています。子どものお世話をしたり、活動の運営したりするのは、市民ボランティアです。

市民ボランティアの皆さんは、「地域の子育ては、地域のみならず応援したい」という思いで活動しています。お母さんたちは、子育て世代の防災について学び、スタッフの皆さんは、飽きてしまった子どもたちに声を掛けるなど、温かい眼差しで見守っていました。「子どものため」に母親と住民が集まり、お互いが学びややりがいを得られる、地域活動の場がそこにはありました。

### 学校を開く 「コミュニティスクール」

現在、県が認定する学校・地域の連携事例「しずおか型コミュニティスクール」として、市内の小中学校25校中18校が認定されています。次の3つの条件を満たす学校を、静岡県教育委員会が認定・推進するものです。

① 学校経営構想（グランドデザイン）において地域との連携・協働を明記

② 地域固有の資源の活用とバランスの取れた「有徳の人」の育成を志向

③ 保護者・地域住民による学校運営への「実質的な参画」

しかし、全校での実践や協議会組織など、取り組みには地域差があります。子どもの「生きる力」の醸成を、学校と家庭だけでなく、地域住民が参画して行う。また地域住民の活躍の場にもつながり、居場所を創出する。子どもと住民の互いを生かす関係を構築する取り組みを、地域の状況に応じて、実現可能な形で探っていく、広い範囲で進めていくことが課題となっています。

住民は子どもの教育のために、各







地でさまざまな取り組みを行っています。中には「コミュニティスクール（学校運営協議会制度）」を活用し、地域との連携を図っている自治体があります。磐田・御前崎・袋井市では、市内全小中学校をコミュニティスクール化し、教育環境整備を進めています。これは、住民が学校運営に参加する協議会を設置し、地域の力を学校運営に生かす「地域とともにある学校づくり」を進める取り組み。協議会では、学校運営の基本方針の承認や、学校運営について教育委員会・校長へ意見などを行います。

既存の学校地域支援本部などの組織から発展させ、協議会を作った学校もあります。また、各地域で行われている学び場の組織や核となる人に、学校と地域の橋渡し役になってもらうことも考えられます。元々地域で活動している人々を核に、学校運営に参画していく。学校側も、地域連携担当の教員が核となる人材と連携協力していく。それぞれに合った「地域とともにある学校づくり」が求められています。

子どもでも大人でも、家族がいてもいなくても、誰でも学び居場所を見つけ、輝ける。そんな社会を描く社会教育には、学校・地域で活躍する人材が必要です。あなたも「子どものために」を合言葉に、学校や地域で活躍の場を見つけてみませんか。